

鶴 交 頸

椎 名 利

「第九鶴交頸 男正箕坐 女跨其股 手抱男頸 内玉茎 刺麦齒 務中其实

男抱女尻 助其揺拳 女自感快 精液流溢 女快 乃止 七傷自癒」

(医心方 房内)

「もうすぐ二十一世紀だが、二〇一〇年になると、五人に一人は、老人だそうだ。年寄り嫌だ。と言って我々ももう予備軍だ。なにかよい薬はないものかね。丹波先生」

私は、少し腹が出て熟年らしい風格を備えてきた彼に向かって軽い口調で訪ねると、丹波は、意外にまじめに、

「ははは、無理を言うな。生理的に衰えるのを避けられない。ただ、生きいきと生活する術はあるがね」と応えてきた。

今夜は、土曜日のせいで、『妙』も静かで、この奥の座敷に、ママも先ほどから座って、久しぶりに上京してきた丹波を迎え、私たちのお相手を努めてくれていた。

「なんだ、その薬は？」

「おまえ、技術屋だろ。そんな薬あると思うか。色ごとだよ。いろいろと」

「わかっているようなこと言うではないか。『街に出て恋をしるか』」

「ばか！ 子どものおままごとではあるまいし、恋愛ごっこをしろと言っているのじゃないよ。『性愛』だよ。男女関係の基本に戻れと言っているのさ」

丹波は、ママに目を向けると、

「うん、今、おれが若かったら、ママに惚れていたな」

彼の同窓生との恋愛は、一時、親たちの激しい反対にあった。今では東京から二時間余りで行ける町だが、当時は田舎町であったためか、代々医者で旧家の両親は、長男の彼に同じ町の素封家の娘をと考えていたようで、都会育ちの娘になんとなく違和感を覚えたらしい。

本来、良縁で親としても反対の理由などあるはずはないので、しばらくすると、母親がすっかり気に入ってしまった。

ただ、その過程で、丹波が彼女に（家族が反対なら、嫌！）と、すねられたらしく、今でも彼は女房に頭が上がらない様子だった。

そんな丹波を眺めながら、私は、

「おいだめだよ。ママは。おれが惚れているのだから……」

私がこう言うと、

「先生、なにかよいお薬ないかしら。『オーさん』たら、奥さん以外見向きもしないくせに人前では、あの調子でいつも空手形なんですもの。憎らしいから、わたしをめちゃめちゃに好きになる惚れ薬、かけてあげたいの」

流し目で膨れっ面を装うと、私を一瞬にらみ、丹波に顔を向けた。

ほどよい高さの細い鼻梁、大きめの口元が、ハーフがかった印象を与える。耳元には、先日、私がプレゼントした細かい細工がほごされている大きな金色のピアスをつけている。ときどき、さりげない視線を私に送ってくる。

「そうだな、確かに、こいつ、口ほどでもないからな。先月、同人誌にラブシーンを書いているけど、経験とは思えんものな……。それに照れている。それで思いました。おまえの小説の題材になるかと思って……」

大学は同期だが、学部の違う丹波と今でも友達でいられるのは、文学だった。お互いに理系だが、なぜか二人とも文学に興味を持っていて私は、仕事の傍ら小説を書くのを楽しんでいた。

丹波が、わたしの前に置いた一葉の写真は、鷺脚の台に置かれた四段重ねの重箱だった。

黒漆塗りで鶴が松を啜えて飛んでいる、いわゆる、松喰鶴文様が描かれていた。

「これなんですか？」

「おれのうちが、江戸時代から二十数代続く医者の家系だと話したことがあったな」

ぐい飲みの酒を、うまそうに空けると、

「これは、おれのご先祖さまが往診の時、薬を持ち運ぶのに使ったものだそうだ。この間、久しぶりに蔵の虫干しをしたとき見つけて、撮ってきたのさ。おまえに見せようと思ってな」

よく撮れた写真のせいか、金色の松喰鶴の描かれた重箱は、いかにも由緒ありげだった。

「それにさ……」

丹波は、さも大事そうに鞆から和綴じの本を取り出した。

紺色の表紙に『典薬頭異聞（てんやくのかみいぶん）』と、毛筆で書かれた本は、筆写されたものらしく、少し黄ばんで、ところどころ虫に食われ、水にしみたのか文字が滲んでいた。

早速、私は日本の古代医術の発展に関する文献調査に着手した。

古事記にある『因幡の白兔』に登場する大国主命は、わが国でもっとも古い医術の神様であるが、

允恭天皇の三年（西暦 四四六年）に天皇の治療のため新羅から来朝した金武（こんむ）が、我が国で記録されている医師の嚆矢である。さらに、欽明天皇の二十三年（五六二年）、新羅を通じて智総がもたらした中国の医学書が、わが国に入ってきた医書のもっとも古いものとされている。

その後、遣唐使を通じて、直接中国の医書がもたらされているが、一方、我が国でも大同三年（八〇八年）に阿部真直（まさなお）により『大同類聚方』（だいどうるいじゅうほう）百巻が、続いて、菅原岑嗣（みねつぐ）による『金蘭方』（きんらんぼう）五十巻が作られたが、いずれも現存しない。

現存するのは、平安朝の永観二年（九八四年）丹波康頼（やすより）により編纂された『医心方』（いしんほう）三十巻である。

後漢の霊帝の子孫で、日本に帰化した阿智王の八代目とされる丹波康頼は、『黄帝内経』をはじめ、古代より隋・唐にいたる多くの医書から、陰陽五行説など観念的な部分を除き、実用面に重きを置いた三十巻に及ぶ一大医学全集を編纂し、宮中に献上した。これが名高い『医心方』で、宮廷医学の秘典とされ、この功により康頼は、丹波宿禰の姓を賜り、和氣家に並ぶ医家の地位を不動のものとした。

『医心方』は、医術・本草・養成からなるが、その中心思想は、『養生』（ようせい）であった。

この思想は、『生を養う』ことで、もっぱら『あるべき、自然の生の生き方』を説き、陰陽の和合が宇宙の原理であり、『男女は合体するのが本来の姿である』との考えから房中術を発展させた。

これらの思想は、中国の春秋・戦国時代の老壯思想に由来するが、後に三世紀頃から道教として歴史に登場する。以後、現世肯定的な道教は、生の豊饒を善とし生の本質に『快樂』を置き、隋唐時代に全盛を極めるが、宋代には儒教により邪教とされ、中国では古代の房中術は失われていった。

『医心方』巻二十八房内は、古代中国の『素女経』（そじょきょう）『玉房秘訣』（ぎょくぼうひけつ）を始め約二十種類に及ぶ書物からの抜粋で、すでに原典が散逸しているため、貴重な文献とされている。

近年、馬王堆（まおたい）漢墓から発掘された医術文献の中にその祖形を見ることが出来る。

この『医心方』三十巻は、仁和寺本、半井家本など多くの写本を生み出しながら現代にいたるが、明治三十五年には、中国の葉徳輝の門人が、上野の帝国図書館に保存されている『医心方』房内を見て、その中に中国では既に喪われている隋・唐の房中術を見だし驚嘆し筆写した。

また、明治三十九年、土肥慶蔵らによって全訳が試みられたが、房内が猥褻と判断され、発禁となり、この部分を削除して出版されている。

『典薬頭異聞』は、この丹波一門に由来するもので、後一条の御代に並ぶものなき名医とされた典薬頭、丹波安胤（やすたね）の物語であるが、丹波家の系図をひも解いてみたが、このものの名前は見当たらなかった。

この本には、判読出来ない箇所、欠落があり、想像で補はねばならぬ部分もあったが、原文の物語性を損なわぬよう、出来る限り忠実な再現に努めた。

なお、丹波の代々の家系が、この丹波家に繋がるのかどうかは判然としなかった。

蕪の典薬頭

(一)

典薬頭丹波安胤は、還暦を迎えると、家督を長男の安惟（やすただ）に譲り、閑静な場所に居を構えたが、往年の安胤の名声を慕い弟子入りするもの、また彼の評判を伝え聞きやってくる患者が跡を絶たなかった。

今日も医生たちを前に、

「医術の基本は、『養生』（ようせい）にある」

狩衣（かりぎぬ）姿で正座して朗々と語る安胤は、とても老人とは思えなかった。

「病にかかってしまつては、ほとこす術は限られてしまう。が、医術の本来の目的は、気を充実させ、病を未然に防ぎ、長寿を目指すことである。つまり、この世は、天と地、太陽と月、男と女のように陰陽で成り立っている。この万物はすべて気の集合体である。病は、人の気の空いたところに邪気が憑くことにより引き起こされる。医術は、もっぱらこの欠けた気を充実するための『養生』にあり、気を補い病にかからぬよう日ごろの生き方を教えるものでなければならぬ」

安胤は、若い医生を眺めながら『黄帝内経』（こうていだいけい）など唐土の書を筆写しながら学んだ当時を思い出しながら話していた。

「そのためには、天と地の気が触れ合つて森羅万象を生むように、男女の触れ合いが、人の気を補充させる。陰と陽は一体となることで、その本来の姿となり、新しい生命を育む。つまり男女のまぐあいこそ養生の根本である。男女が一緒に居れば、そこに性的関係が出来るのが自然で、睦みあい、体内の精気を交換せぬと邪気が体内に滞留し病になる。しかし、性欲を放縦してはならない。調和がとれた生活を心がけねばならぬ。それを教えるのが房内術である」

安胤の房内術の講義は、つとに評判が高く、その評価は彼を取り巻く女房どもの噂で裏打ちされていた。

「男女の交合は、互いに望むものでなければならぬ。そのため、男は、乳首を口に含むなど『和志』に心がけ女の快を引き出すことが先決じゃ」

「女の快は、なににてわかるのでしょうか」

「顔があからむ。乳首が堅くなる。これを『五徴』と言う。かように男女、まず精を満たし、満ちれば、互いに交わり、女、気をやるも、男は洩らしてはならぬ。さすれば、精液は脳に至り、全身に気が満ち、皮膚はつややかに輝き、目もよく見え、頭も明晰になる。これが『環精補脳』と言われる養生の奥義である。気をやるのを三度耐えれば諸病が治り、十回に及べば仙人になると言われている」

「精の漏れるのを防ぐには」

「修練じゃ。その気持は奔馬を朽ちた縄の鞭で御すようなきわどいものである」

安胤は、医師の熱心な質問に自身も顔を紅潮させて応えていた。

講義を終え部屋に戻ると安惟が待っていた。なにか心配げな顔で、安胤に会うと挨拶もそこそこに

「父上、頭の中将が鬼に憑かれた話お聞きになっておりますか」と問いかけてきた。

供の舎人の話では、この美貌の貴公子は好色の念が強く、両親から夜歩きを禁じられていたにもかかわらず西の大宮大路の屋敷から、かねて思いをよせていた東の姫の元にしばしば出かけていた。

その夜も供の舎人一人を連れて、大宮大路をのぼり東の方に進んだが、やがて、美福門をすぎたあたりで、東の方向から怪しげな人々が松明を灯してやってくるのに出会った。

頭の中将は、「どこかに隠れねば」と言うと、舎人が「神泉苑の北門が開いているようでございます。そこでやり過ごしては」と言うので、北門に乗り入れ馬から下りると物陰に隠れた。火を灯した一向が何者かと眺めれば、なんとそれは鬼どもであった。

おそろしげな様子に若君は、気も転倒していると、鬼どもが「なにか人間臭い。どこかに隠れているに違いない」とこちらに向かって来たため、脅えた若君は失神してしまったと言う。

「昨夜より、伏せたままなので私も呼ばれ診たてはいるのですが、熱が高く、発汗がひどくはかばかしくありません。医心方にも、鬼が人に取り憑きますと、刃物で刺されたように胸・腹が痛み、血を吐き、鼻や口から出血し、精魂が衰弱している時は死ぬ場合も多くあるとありますが、なにか良い治療はないのでしょうか」

安胤は、最近渡来した僧長秀（ちょうじゅう）がもたらした『桂心』を思い出し、

「『桂心』は、桂の樹皮で薬効としては、発汗、解熱、鎮痛に聞くといわれており、日本でも古くからその効用は知られていたが、桂の樹皮の効く部分を見分ける方法を知らなかった。僧長秀がそれに長じておるようじゃ。わしが、長秀殿に手紙を書いて頼んでみよう」

肯くと安胤は、早速書をしたためた。

安胤は、いつも真摯な態度で患者に接する典薬頭の安惟を満足げに眺めながら、ふと自分が『蕪の典薬頭』と称されるに至った、安惟の出生にまつわる不思議な出来事に思いを走らせていた。

(二)

初冬の澄みきった空がひろがる、丹波の国のなだらかな丘陵地帯の道がかなたで、森蔭に消えている。その森蔭の道を下ると、京はもうすぐだった。

(京に戻れる)、その思いだけに駆られて、駒を進めている安胤には、その風景はほとんど目に入っていない。

本領の一門の長を治療するため派遣された安胤が、京を離れ、丹波の安万田（あまだ）に下ったのは真夏の頃だった。

医家の名門に生まれ、幼いときから神童と噂され、最年少で医師としての教育を受けた安胤は、ここでも他に抜きんできた才覚を発揮していた。

当然、二十才そこそこで医博士の試験に合格したが、丹波の長の治療が、安胤の初めての現実の病への挑戦となった。

安胤が、派遣された時は、修験者による『物の怪祓い』からもみはなされた後だった。

当時、病は『物の怪』が、バイ菌のように憑くのが原因と考えられていたので、当然、真っ先に招かれるのは、高名な僧、祈祷師、陰陽師だった。

その長の病を、安胤は、丹波家秘蔵の『阿掲陀』（あかだ）などを用い、根気良く治療した甲斐があり、病は徐々に回復し、全快をみた。

馬の背には、喜んだ長から拝領した数々の品があり、安胤の心を弾ませている。

ふと、長の北の方の面影が浮かんできた。

いつも、長の治療のとき、几帳の内から匂う香でしか知らぬが、見えぬだけになおさら艶めいて感じられる。

昨日、別れの挨拶に北の対屋に案内され、お方様の御簾の前に坐った。御簾の内には幾人かの侍女がいるらしい話し声が聞こえたが、案内してきた旨告げる侍女の声で静まると、幾つかの視線が向けられるのを感じた。

「丹波安胤と申す医師でございます」

平伏した安胤が名乗ると、北の方は歌うような声で、

「まだ若いのに、今回の治療は見事でした。わたしからもお礼申します。噂では、そなたは最も若い医博士だそうですね」

意外に、きさくに話し掛けられる北の方に、世慣れぬ安胤は、応えも出来ず平伏した。御簾の内からは嗅ぎ慣れた香が匂ってきて、いつものように心がときめく。

侍女が、小さな火桶を安胤の前に置くと、打ち解けた口調で北の方が、

「今度使われた薬は、秘蔵の物だそうですね」と話し掛けられると、ようやく御簾に向かって顔を上げた。

「『阿掲陀』（あかだ）と申す先祖伝来の仙薬で、古くは天竺からもたらされたと聞いております」

安胤は、父から聞いたその薬の由来を語った。

昔、かの国の王子が病気になった時、加持祈祷・治療が行われたが、病状は日に日に重くなる。国

中で最も優れた医者は、王の最も嫌いな大臣だったがやむなく彼に治療を依頼した。

腹に一物持つ大臣は、王子を殺し国を乗っ取ろうと思ったが、穏やかな顔で、

「よく効く薬を差し上げます」と応えると、すっかり喜んだ王が

「その薬の名は」と問うと、

「『阿掲陀』でございます」

『阿掲陀』は、解毒作用ばかりか猛獣からの難を避け、長寿を保ち、民衆にも敬愛されると言う仙薬でその名は、王も知っており、かの大臣の誠意に感激し自分の今までの態度を改めた。

大臣は、『阿掲陀』と偽って毒薬を与えるが日に日に病状は回復に向かい、やがて全快した。

そのことを不審に思っていた大臣の部屋の扉を、ある夜叩く者がいた。

「誰か」と問うと

「『阿掲陀』でございます」と応え、

「大臣が王子に差し上げた薬は猛毒でございます。飲めば必ず命は奪われます。王も王子も『阿掲陀』と信じておりますので、服用し死んだとなつては、我々の名誉に関わります。そのため、我々が代わりになり体に入り治療いたしました」

安胤は、ここで一息つくつと、さらに続けた。

「『あかだ』は梵語で、全てを除くとの意味で、不老不死の薬とされております。また華嚴経にも『この薬を用いると体内の一切の病を除くことが出来る』と記されております。『阿掲陀』には魂があるのです。その魂は清廉な人にしか発揮されません。長は清廉な方なのです」

語り終えた安胤は、女房たちの視線を感じると顔を赤らめた。

「病は、物の怪によると聞きますが」

北の方は言葉を続けた。

「『医心方』にも三尸（さんし）の話がございます」

安胤は、人のからだの中には三尸という鬼がおり、体内を自由に飛び回り祭壇に供えられたご供物を食べて住んでいるが、いつも人の行動を見張っていて、人の命を縮めようとしている。

庚申の日には、天に昇り司命星にその人の一年間に犯した罪や悪事を報告し、大きな罪は一年、小さい場合は一日の寿命を奪う。

従って、長寿を求める人は三尸を除く必要がある。

「そのため常日頃から欲・嫉妬などのこだわりを棄てて、人に善行を施し大らかな気持で生活する必要があります。さすれば物の怪とて憑く余地がありません」

「さすが将来を宿望される医博士ですね」と、女房たちの感嘆の声が聞こえたが、安胤は、ただ御簾の内のふくよかな麗人の顔かたちを妄想していた。

やがて、御簾が少し上げられると紅の小袿（こうちぎ）の袖を覗かせ白い手が、安胤への引き出物を差し出すと、

「典薬頭にもよしなに」との言葉を賜り、安胤は一礼すると静かに立ち上がった。

そのか細い白い手が、目に浮ぶと妄想の中での北の方は、紅の表地に白の『雪の下』の色重ねの小袿で、豊かな髪で覆われていた。下ふくれした顔に細くかかれた眉。今だ知らぬ白い肌の北の方が、安胤に微笑みかけると、どこからともなく、北の方の香が匂ってくる。

安胤は、いまだ男女の交わりを知らぬが、医生として学んだ『医心方』を思い浮かべると、いつも、男女の睦みあう情景を鮮明に浮びあがらせられる。

『およそ、初めて交わる時には、先ず座して後ろに臥す。女は左に、男は右に臥す。臥しおわりてあと、女をして正面に仰臥し、足をのばし股をひらかしむ。男、その上に臥し、股のうちに跪づく。すなわち玉莖堅きをもって玉門のくちにあたふ。……往来して撃ち、進退さしめれば、女、必ず死を求め、生を求め、性を乞い、命を乞う。すなわち布を以て拭きて後、すなわち玉莖を以って深く丹穴にいれ、陽台に至らしむ。がんぜんとして巨石の深溪に抱かるるがごとく、すなわち九浅一深の法を行なう』

駒は、ゆっくりとした脚取りで進んでいる。

邪淫に満たされ、硬張した安胤の一物が、下腹を突き上げた。

『淫して洩らさず』が、養生の基本だった。

曰く、『男女の交接は、男、浅内徐動、出入欲希にて、女、気をやるも洩らさず、快味のみを得、自身の精液は血液を通じて脳に送る。これを還精補脳という』

その教えを守れば、仙人にいたるとされているが、妄想はとめどなく、安胤は、その欲望を押さえられなかった。

紅潮した安胤が、気を逸らすべく辺りに目をやると、傍らの庄屋らしい門構えの農家の垣根に、新しい蕪がかけられているのが目についた。

採られたばかりのふっくらとした蕪、その白さが、安胤に北の方を連想させると、安胤は堪らず駒をとめた。

まるまるとした白い蕪は、むっちりとした北の方の大腿にかさなった。と、妄想に取り付かれた安胤は、蕪をとりあげると穴を穿った。

冬にしては暖かいこの丘陵地帯には、安胤以外の人影は見当たらなかった。

生け垣の陰に身を潜めた安胤は、指貫の紐をゆるめると、雄々しく立ち上がった陰莖に手を沿え、

穿った穴に突き立てた。

北の方の玉陰を思わせるその孔は、淫靡な妄想に重なり、若い安胤は忽ちに淫をなし精を放った。ほどなくして立ち上がった安胤は、その蕪をあたりにうち捨てると、馬にまたがり、京を目指した。丹波の長に施した治療は、京で、大変な評判になったが、安胤の名をさらに高める出来事が起きた。時の大納言が物忌みに取り付かれたのは、もう冬も終わりの頃だった。

高名な僧、多くの祈祷僧によるものの怪払いが昼夜行なわれる中で、父の典薬頭に随伴した安胤も、この治療にあたっていた。数日、いろいろな薬を煎じて使用したが顕著な回復は見えず、一同鳩首して治療にあたっていた。

今夜も、平癒祈願の誦経が盛んに行なわれている。

宿直の安胤は、夜更けに不覚にももうろうとしていると、二匹の鬼たちの話声が聞こえてきた。

「あの医者は、名医だといわれているから、われわれは殺されてしまうのではないか」

「いや、盲の上、膏の下に入っしまえば大丈夫だ」

「だが、万一、八毒丸を飲ませたら……」

「その時は、すべてがおしまいさ」

はっと目を覚ました安胤は『病膏膏に入る』の言葉を思い浮かべながら、夢を反芻し、『膏』に入ると、薬は効かぬものと思っていたが、あらためて『八毒丸』の効用を調べ、判然としなかったが、仏の啓示と思い、典薬頭にその投用を具申した。

その薬の効果は、素晴らしかった。

終日続いていたものの怪に憑かれたかの大納言のうめき声が消えると、大納言は、ぼんやりと目を見開き、やがて床に起き上がり、数日すると、薄い粥を飲むまでに回復した。

安胤は、京童にまで名を知られる名医になり、この功績で典薬允（てんやくのじょう）に推挙された。

(三)

さる年の七月七日、父の典薬頭は、一族の者と典薬寮に属する医師たち、使用人を集めた宴会を催していた。

この日は、長筵が敷かれた大広間に、銘々、持ち寄った酒肴で、歓を尽くす日で、頭を中心とした酒宴には女房ども混じり、楽しげに進んでいた。

そこに、年のほどは四十ぐらいであろうか、浅黄色の単に袴を纏った卑しからぬ女が典薬頭に近づくと、

「わたしの娘に起こった不思議な話を聞いてください」

平伏した女は、

「娘の不祥事を申し上げるのは、親として、なんとも耐え難いのですが、余りにも不思議なので、偉い医師さまに聞いていただきたいと思って参りました」

その女は 丹波の庄屋の妻だとの前置きで、次のように語った。

もう三年になるでしょうか、まだ冬の始め、私の主人が、若い下女たちを集めて、蕪菜摘みをしたときの出来事でした。

娘によると、集められたおぼこな女どもは、話したり、笑ったりしながら、熱心に仕事を続けていました。

わたしの娘もそれに混じり、垣根にそって遊んでいますと、孔の空いた蕪に目を留めたのです。

「これなにかしら？ どうして孔なんか空いているの……」

拾い上げられた蕪の孔の部分には、白い粘液がついている。しばらく、手で弄んでいたが、好奇心の強い娘は、粘液を少しなめてみたようですが、薄気味悪くなりそのまま捨てたそうです。

年も明け、春の陽射しがさすころ、娘はなにか悩ましげな様子になり、食も進まず、大儀そうな様子になってまいりました。月日が経つにつれ、なんと身ごもっているのが分かったのです。あきれて、

「なんとしたことをしてくれたのか」

怒りもならず娘に問うと、恥ずかしげに

「私は、まだ一度も男と接したことはありません。側に寄ったことさえないのです」

家の下人たちに聞いても、

「一向に、男とねんごろにしているのをみたことはございません」と言うので、なんとも不思議な話だと思っていると、

「ただ思い当たるのは、あの孔の空いた蕪についている白いものを少し舐めたことです。おかしくなったのはそれからです」

私は、娘の言葉に納得は出来ませんでした。が、父親の名も分からぬうちに、月満ちて娘はかわいい男の子を産んだのです。

傍で聞いていた安胤が、その生まれた月などを確かめ、溯ると丹波の帰りとぴったり一致する。

後日、三年前の出来事を父に正直に語り、くだんの庄屋を訪ねた安胤は、子供と会うとあまりにも自分に似ているのに驚き、その不思議な物語も前世の宿縁と、子供を引き取るとともに、娘を妻とした。

この噂は、すぐに京に広まり、だれ知らぬ話になった。

まずは、安胤の好色的振舞いが、好奇心の的になったが、その不思議な話を自ら真摯にうけとめ、親子を引き取った態度は、良識ある行為として世間の評判となり、逆に彼の人気を高めた。さらに、触れもしないで子供を授かるのも、安胤の靈験あらたかな故であろうと、なにか言い知れぬ不思議な力を持つ医師として、今まで以上にもてはやされた。

後に、頭に昇進すると、『蕪の典薬頭』と、皆に親しまれた。

安胤は、今、典薬頭を勤める緋の狩衣姿の安惟を、神から授かった子と満足げに見やった。

(四)

「いや…、近頃はめっきり体が衰えてしまったが、どうしたものかのう」

安胤は、最近とみに弱気になっている中納言のぎょろりとした目付きを見つめながら、好色な中納言の意図を推し量りながら、

「それは交合の仕方が悪いからでしょう」と言うと中納言は、

「『環精補脳』が養生の奥義であったのう。『淫して洩らさず』との、秘儀は聞いておるが、漏らさずして何が男女の楽しみかの」

「これは中納言殿のお言葉とも思えませぬが。長寿を得るためには、交接法を知らぬ若い女ほど良いとされていますが、なんぞ仙女にでも憑かれましたかな」

仙女と聞くと不信そうな顔をする中納言に安胤はこう語った。

「昔、陳の市場で酒を売っていた女丸と言う女がいた。ある時仙人が店を訪れ、酒を飲み酒代の代わりに『素書』五巻を預けていったが、女が開いてみると房中術の書物であった。女は、その要部を書き写し、美少年を誘っては酒を飲み、閨房で書物にあるままに行ってみた。初めはぎごちなかった行為も、回を重ねるごとに、快味がわかり男は傷つくものの女丸はますます健康になり、顔の色艶もよくなった。このようにして三十年経ったが女は、元の若さを保っていた。

後に立ち寄った仙人が『仙道を盗んでも師がなくては、羽があっても飛べんはのう』と言い女丸を連れて去った。

房中術は男が会得しておくべきもので、房中術に長けた女房は、仙人しか扱えませぬ。慣れぬと有害ですぞ」

昔からなにごとによらず互いに腹蔵なく話し合う仲間の中納言は、安胤の話に思わず苦笑すると、

「それでは如何したものか」

「蜀の太守が飲んで七十にして三人の子を生したと言う『禿鷄散』（とくけいさん）などの薬もございますが、志で応じるよりしかたがありません」

「志とは、また難しいことを言うのう」

「よもや養陽の基本をお忘れとは、考えませぬが、男が大いに益を得るためにはまぐわいを知らぬ女性が望まれます。今こそ、男女の原点に戻るべきかと存じます。医心方の至理に『男女の交接は釜でものを煮るようなもので、ゆっくりと煮込まねばならぬ』とありますが、このことこそ物事の基本です。体位などもいたずらに奇をてらわず、竜翻のごとき自然体でのぞむべきでしょう」

語りながら安胤は、ふと、妻を亡くしてから通いはじめた後家との昨夜の房事を、思い出していた。

部の間をすりぬけた月の明かりが、わずかに女の姿を浮き上がらせている部屋の中で男は、女盛りの太じしのこの女房の下唇を含み、両腕を廻し口を吸うと、男の上唇を含んだ女も激しく口を吸い続け、ある時は舌を絡め身をひねるうちに、深く股に差し入れられた手が、女の淫情をそそると、衣装の前をはだけ官能にひたっていた女房は、やがてうつむかされ、尻を高く突き出すと、背後に膝まづいた男は深く静かに×××と進めると、××は熱い泉となりあふれ、女の歓びの昂ぶりを眺めるうちに男は、まだ、女を知りはじめていくばくもせぬ若者のように、快感に耐えられず精を放てば、まるで、虎が歩く様子を思わせる虎歩（こほ）と呼ばれるこの体位を好む脂ののりきった女房は、

「あなたさまは、いつも……」と、消え入るような声で呟くと、安胤に愉楽のあとの倦怠感に包まれた体を預けてきた。その情景を思い浮かべると、年をとったとは言え、若き日に学んだ房術と、その生来からの色好みが磨き上げた技巧は、まだまだ女房の欲望を満足させられるとの確信に満ちていた。

そんなある日、御簾から打出の女房装束を覗かせた女車が、安胤の屋敷にやってきた。

「だれの車か」

安胤が、尋ねても、雑色どもは応えもせず、牛を車からはずし、長柄を軛（くびき）に差しかけると、門の脇に控えた。

そこで、安胤が車に近づき、

「これはどなた様ですか。どのようなご用件でおいでになったのでしょうか」

この応えに、車の中の女房は、名乗りはせずに、

「まことに恐れ入りますが、どこか適当な場所に部屋をしつらえていただけませんか」

若やいだ女の声が車の中から応えた。

近頃は、年増の女房しか知らぬ安胤は、久々に若い女房に声をかけられ、すっかり気をそそられ、たきこめられた香からその姿・形を想像し年甲斐もなく心を弾ませていた。

早速、奥の一角の目立たない部屋を大急ぎで掃除させ、畳を敷き、屏風を立てさせると、車へ戻り、

「用意が出来ましたので、どうぞお越してください」

安胤が、手を取ろうと近づくとその女房は、

「では、少し離れてください」と言い、いざるようにして車から出ると、顔を扇で隠し、降りてきた。

(だれかお供の女房でも居るのか) と、思っていたがその様子はなく、女童が車に近づき、蒔絵の櫛箱を取り出すと、雑色どもがあわただしく寄ってきて、牛を繋ぐと飛ぶようにして車を引き、屋敷を出て行った。

用意された部屋の屏風のうちに、女童とともに坐った女房に、

「さて、あらためてご用向きをお聞かせ下さい」

安胤が、丁重に問い掛けると、

「恥ずかしがる年でもありませんので、どうぞ中にお入りになってください」

女房に言われるままに屏風の中に入った安胤は、そこに三十ばかりで、黄色の『女郎花』の重ね着をした女房を見出した。

女房は、細く引かれた眉毛だちの目元に笑みを浮かべた。黒髪は、腰のあたりまでたれ、たき込めた香が妙なる匂いを漂わせている。

女房は、特に恥ずかしがる様子もなく長年連れ添ってきた妻のように打ち解けた表情を見せていた。

安胤は、特に病にも見えないこの女房を一瞥したときから、幾分、垂れめの目元が愛らしく、小袿の袖から覗く、指元に窪みのあるふくよかな白い手から、弾力ある姿態を妄想させていると、この女房に、自分の内心を見透かされぬかと気恥ずかしさを覚えた。

(なんとも不思議なことだ。まだ若く、こんな美しい女房に会えるのは) と、その幸運をいぶかしがるものの、生来の色好みをかきたてられると、

(この愛らしい女房を意のままにできたら…) と、自然に口元もほころび、欠けた歯を見せながらも、気だけはすっかり若やいだ安胤は、女房にいざりよった。

「どこがお悪いのでしょうか？」

安胤が、口元に皺を寄せながらも満面に微笑を浮かべ、問い掛けると、

「人の心というものは情けないもので、命惜しさには、どのような恥も忘れてしまうものです。たとえば、どんな恥ずかしい思いをしても命さえ助かればと、ここへ参りました。ですから、生きるも死ぬもあなたさまでいただきます。どうぞこの身をお任せしますから…」

泣き崩れる女房に、

「一体どうしたのですか。どこといって悪いようには思えません…」

安胤の言葉に、顔を上げた女房は、袴の脇をひき開けて股の付け根の部分を見せた。ひき開けられた袴の間隙から、股の白い肌に少し赤く腫れたものが見える。安胤は、その腫れものを観察しようと、目を近づけたが衣服の間隙からでは、よく見えない。袴の腰紐を解かせ眺めたが、意外にも、黒々と

した陰毛に覆われている。

なお、顔を近づけると、烏帽子が邪魔になる。

安胤は、烏帽子を脱ぎ顔にかかる数本の白髪をかきあげながら陰門に触れてはと、注意ぶかく毛を左右に分け詳細に眺めると、その腫れもの中心部は紫色をおび盛り上がり、このままでは命に関わる悪質なものと思われた。

すっかりこの女房に惹かれた安胤は、

(わしも、長年、典薬頭を勤め、名医と賞されたのだから、なんとしてもこの難病を治さねばならぬ)と、心に決めると恥ずかしい部分でもあるので、余人には任せられぬと、すぐに自ら昼夜の区別なく治療に専念した。

あらためて腫れものに効く薬の処方などを丹念に調べ、必要な薬草を弟子たちに集めさせると、自らその薬を調合し患部に塗布した。

しかし、その腫れものは、日増しに腫れ上がり、ひどく痛むらしく、人の肩を借りねば厠へも行けず、さらに熱もでて、女房は、悪寒に震えていた。

治療を始めて三日目、梅干しぐらいの大きさになった腫物は、膿があふれ悪臭を放っていたが、詳細に観察していた安胤は、中央に小さな穴を発見すると、充分化膿したと判断し腫れものを切開すると、一気にその膿を除いた。

翌日、女は、すでに痛みから開放されていた。患部を診た安胤は、腫れものの治療が成功したのは間違いと確信した。

安胤の経験と努力が、患部を驚くべき速さで回復に向かわせ、数日を経ると患部は瘡があるものの乾いた状態になった。

すっかり安心した安胤の目は、自然に玉陰にそそがれた。今まで患部しか観察してなかったが、気が付いてみると玉陰は、意外につややかな毛で覆われ、蕾を頂点にひろがる弓状の陰唇は生き物のように静かに息づいている。

触れればふと目を覚まし、今まで忘れていた本来の活動を始めるように思えた。

安胤は、あらぬ妄想に襲われていた。

闇の中で安胤の節だった手が、女の官能を探り当て、その掌が片手に余る乳房を揉みしだき始めると、いつもの感覚を甦らせた女が、迎え入れようと衣装の前を開き、女の胸に顔を寄せた安胤は、その固くなった突端を唇で刺激すると、女は下半身を露わにしたまま、男の下に臥すと、なおも乳房をもみしだく巧みな男の業に悶えながら、両腕を安胤の首にからめ、反り返るようにして抱きつき、女の裾を割って忍び込んだ安胤の指を熱い湧き出るような泉に誘うと、

—— この間、一行不明 ——

やがて、固い一物があてがわれ挿入されると、快感を露わにする女房の玉陰は、まるで生き物が身を守るかのように烈しく収縮を…

—— この間、数行不明 ——

…女は袖に顔を埋めると、歓びの声を上げた。

妄想に憑かれた安胤は、それを払いのけるべく、

『常に大きな慈しみであまねく病を救わんと欲し、欲することも求めることもあってはならぬ』との、医の心を思い浮かべようと努めた。

しかし、日に日によくなっていくその女房の喜びを浮かべた口元、ふくよかな頬を眺めるとそこには一人の女としての存在しか見出せなかった。

かろうじて、『男女の交合は、互いに求めるものでなければならぬ』という男女の基本が安胤を押し留めていた。

よくなっているのが女房も分かるらしく

「後どのくらい治療が必要なのでしょう」などと問いかけられると、安胤は決まって言葉を濁し、

（どこのどなたかわかってから帰すとしよう。それまではなんとか留めておこう）と思い、鳥の羽で塗り薬を一日に数回つけるだけにすると、

（これで大丈夫）といつになくご満悦であった。すると、この女房もすっかりうちとけてきて

「わたしは、あなたさまに、もうお恥ずかしいありさまをすっかり見せてしまいましたからには、あなたさまをひとえに親とお頼み申し上げるばかりです。つきましては、わたしが家に帰ります折には、こちらの車で送ってください。その時には、わたしの名前もお明かししましょう。またこちらにしばしばお伺いするつもりですし……」などと話すので、安胤も、この女房の心持ちを知れた思いがしてくると、今までの経験からもう自分の意のままになるとすっかり気を許していた。

（もう女もその気になっておる。四五日、このままにしておき機会を見つけねんごろになろう）と気持ち昂ぶらせていた。

そんなある日、

（今夜は…）と、胸に一物ある安胤が自ら夕食の膳を用意して運んでいき、声をかけたが応えがない。

（用をたしにいつているのだろう）と、安胤は一旦引き上げた。

火ともし頃、先ずは明かりをと、燭台に灯を灯して持って行くと、櫛箱の側に着物が脱ぎ散らかされているので、

「屏風の後で、なにをしておられるのですか」

なんの応えもないので不思議に思いながら、安胤が屏風の中を覗くと、どうしたのであろうか女童

も見えない。着重ねていた着物も袴も置きっぱなしにされている。ただ、夜着としていた綿入れ一枚が見当たらなかった。

その時になって初めて安胤は、

(女房は、女童と夕刻、その着物のまま逃げてしまったのではないだろうか)という不安を感じると、呆然とした。

その狼狽する様子を見ていた弟子たちは慌てた。

師の安胤自身が真剣に治療するのを、その女房への年甲斐もない恋慕と野次馬根性で見守っていただけに誰もが対策に苦慮した。

とりあえず、門を閉じさせ大勢の人で手分けして家中探したが見つからない。

残された衣装を子細に眺めると高価なもので、その女房もかなり身分のあるものと思われたので、容易に名なども分かるであろうと、早速、手分けして心当たりを尋ねさせた。

数日たち、半月が過ぎたが、一向にそれらしき消息を得られなかった。

安胤は、騙されたとは思いたくなく、なにか事情があったのだろうと自分を納得させようとするが、その女房の愛らしい目つきなどがまざまざと思い出されると、あろうことか、その女房のあらぬ姿まで浮かんで来る。

(もう少し治療をしてからと遠慮していたが、なぜもっと早く思いを遂げてしまわなかったのか。たとえ、人妻であっても、時々通っていける女であって欲しかった) と、脂けのなくなった手を白い顎鬚に当てた。

安胤は、娘ほども違う女房に嫌われているとは考えたくなかったが、時が経つと、上手く逃げられたと思わざるを得ず、すっかりふさぎ込むと家に閉じこもってしまった。

この様子を弟子たちは、講義で見せる安胤の艶やかな顔色と重ねてその違いに驚く一方、(悟っているようでも、所詮、師も人間だ) と思うと、妙に親密感を覚えるのだった。

この噂はすぐ京に広まり、聞き知った人たちがいきさつを聞こうとすると、人が変わったように怒りだし、また以前にもましてふさぎ込むようになった。

日ごろねんごろにしていた女の元へも通わなくなった安胤は、屋敷の中で意味不明な言葉を口走り始め、惚けたように門を出ると、なにか探している風情で町をふらつき出した。

その姿は、みな嘲笑をかけたが、いつしか、その姿も見えなくなった。

『典薬頭異聞』了

「古代文明圏では、いずれも性文化が発達し、多くの性典が書かれている。帝政ローマには詩人オヴ

イディウスの作といわれる有名な『愛の技術』があるが、これは生来エロティックな想像力に恵まれた彼が、遊女たちとの情交のために書いたと言われる彼の個性が強く出たもので享乐的あり、繊細で優雅な東洋のものには劣る」

「おいおい、また、根掘り葉掘り文献を調べたのだろう。お前らしいな」

「インドでは、『性は聖なり』で無二の快樂と考えられているだけにその性典の数も多いが中でも有名なのは、『カーマ・スートラ』で、これは単に性愛の技巧書に留まらず愛神カーマの菩薩涅槃の心境に達することを理想として説かれている」

得意げに、真面目くさって、いかにも深遠な話を説くかの私に丹波は、

「発情期がないのは人間だけだから、性を淫蕩なものとせず、なんとか意味づける必要はあるな」

「その通り。中国の流れを汲む我が『医心方』は、中国人の『福・禄・寿』の人生観の反映だ。つまり、「寿」は長寿のことだが、このため男女の交接の必要性を説き、その基本を『淫して洩らさず』と述べられている。それに『和志』、前戯のことだが、『九法』などの体位・技巧の解説は、ヴァンデベルディの『完全な結婚』などよりよっぽど具体的だ。こんな本が千年前に書かれていたとは驚きだ」

私のペダンチックな性典論にすっかり興じた丹波は、

「おいおい、お前、すっかりいっばしの性学者になったな……。それに、確かに『医心方』は優雅だよ。例の九法、体位だが『竜翻（りゅうはん）、虎歩（こほ）、鶴交頸（かくこうけい）……』など、全て動物の名前が付けられている。」

「ところで、俺が参考に送った『房内』の原文は読んだか？」

丹波は私が送った『九法』のコピーを取り出すと、

「『竜翻』は正常位、『虎歩』はバック、『鶴交頸』は茶臼』といったところかな。漢文はなんと読むのか解らぬが、意味はわかるさ」

郵送してあった私の原稿を読んだ、丹波はご機嫌だった。

「確かに、わが家系は、好色で長寿だったそう。爺さんまでしか知らぬがね。おれの親父も、相当なものだったそう」

「駄目なのは、当代の丹波先生だけか」

丹波は、冷酒のぐい飲みにつけると、さも大事な秘密の話をするように、わたしの方に体をかがめると声をひそめ

「おい、あの逃げた女のモデル、ママだろう？」

意外に真剣な顔で、わたしを見つめた。

「ははは、わかったか。おれの描写もまんざらでないのが。モデルもそうだが、リアリティある文を

書こうとすると、経験のないものは書きにくい。ところで……、例の患部を見る場面はどうだ」

丹波は、一瞬、私を見つめ言いよどむと、

「おい、まさか……？」

襖が開き、中腰になったママが料理を持って入ってくると、ポアソンの匂いが部屋に満ちた。和服の上からでも分かる豊かなヒップを見せながら、丹波の横に坐る。

ゆったりと着付けられているが、きちんとつめている襟元。アップにあげられた髪。

日本の女性にしては、高い鼻梁のプロフィールを持つママは、平安朝美人と言うより、造作が大柄で現代的な容姿だ。胸元の白い半襟に、紅のルージュがよく映える。少し垂れ目の目元を丹波に向けると、(なんの話をしていたのですか) と、聞きたげに首をかしげた。

丹波は、彼女の全身を視野にいれるかのように、少し身を引くと、医者が問診時に見せる無遠慮な視線を、ママの胸元から腰に這わせた。

「うん、ママは、きっと『鶴交頸』が好きそうだな」

二人で、目を見合わすと自然に笑いが込み上げてきた。

「わたし、『カクコウケイ』って、お料理知りませんが、中華料理なら何でも好きなの。今度、お二人でご馳走してくださらない？」

(参考文献)

山路閑古 「医心方 房内」日輪閣 ' 76

大星光史 「文学に見る日本の医薬史」

杉立義一 「医心方の伝来」思文閣出版' 91

(2007-1-20)